

た。

それから、毎年九月に行われます穂高町にある殉国塔での慰霊祭には、欠かさず出席させてもらっています。藤巻会長、坂本先生をお迎えして、一世・二世・三世の皆さんと会い、お話することが何よりも楽しみなのです。

母は八十八歳になりました。今では介護が必要な状態で、週二回のデイサービスのお迎えが来てくれます。私も六十六歳になった途端腰痛に悩まされながらも、孫たちに囲まれて毎日を楽しく過ごしています。趣味の大正琴では、平成十年四月に全国大会が日本武道館で行われ、NHKで放送されたドラマの主題歌「夫婦みち」を百十人で演奏しました。

人は歳月を重ねるうちに苦しい過去を忘れようと思しますが、記憶を心から消し去ることはできません。親になってみて、「あのとき九歳でよかった」と思い、二度とあの苦しみを味わうことがないことを願ってペンを置きます。

満州引揚げ体験記

福井県 能登谷 英雄

私は、二十六歳になった昭和七（一九三二）年十二月初旬、本願寺の海外布教使に任命され、昭和十一年の秋、布教のために大連に渡った。ついで元満州吉林省敦化の東本願寺布教所に転任したが、昭和二十年四月召集を受けて、間島省延吉市一〇三二八部隊に入隊した。部隊はその後、ソ満国境に移動したが、その地で終戦を迎え、昭和二十一年秋に郷里福井県に引き揚げた。

その間の十五年の歳月は、過ぎてみれば夢のようにただ一瞬のことだが、私にとっては決して平坦な道ではなかった。つい昨日の出来事のように思い出されるのであるが、布教のために市街地から離れた開拓団を巡回したときには、幾度となく猛獣の咆哮（ほうこう）を聞き、もしや襲われるのではないか

と、おびえながら一生懸命歩いたことや、部隊入隊後零下二十度にもなる極寒期に部隊の一員として戦闘に参加、抗日軍の激しい抵抗にあって敗退し、幾度となく死の淵に立ったことなど、いつも生死の境をさまよう毎日を過ごしていた。しかも終戦後の一年有余にわたる避難生活では、食べるものにも事欠き、衣服も着の身着のまま、ときには病魔に襲われるなど、まさに地獄絵図そのままであった。

人間が生きるといふことは難しいことである。究極のところ自分の力ではどうにもならず、仏に生かされていることを思い知らされたのである。息詰まるような思いの中、何度死を覚悟したか計り知れなかった。

多くの方が異境の地で散華されたり、まだ行方も分からない人々のことなどを思うと、私自身はなんと幸運であったかと思う。このような数々の事実を深く肝に銘じ、このようなことが行く末風化することのないよう語り継ぎ、永遠の平和を

願ってやまない次第である。

敗戦への道

私は終戦の年の昭和二十年五月十九日、現地召集で、間島省延吉市にあった第二百四十八連隊第一〇三二八出村隊（重機関銃隊）に入隊し、一カ月間訓練を受けたあとに、延吉北東八十キロメートルほどの光華山（三〇〇高地）を防衛する部隊に所属になり、防御陣地を構築するための配置に着いたのは六月二十日であった。防御陣地の要点に重機関銃を据えるための掩蓋を構築する傍ら、銃器の取り扱いなどの術科を学ぶのに余念がなかった。陣地の周りは山が続いていたが、この周辺の山には視界を遮る林などはなく、背の低い雑木が所々に生えているほかは雑草が生えているだけなので見通しがよく、防御には絶好の陣地であった。

本部指揮所は陣地後方の山の麓にあったが、四月に現地に入っていた先遣部隊がそこまでの道路を作っていたので、本部への連絡など何かにつけ

て楽であった。本部を少し下がったところは急な崖になっていて、崖下の小さな川はきれいな水が流れていた。重機関銃を運ぶために、この部隊には付きものの馬がいて、この河原で水を飲ませたり手入れをしながら馬に話しかけては、しばし心が和んだのを今でもよく覚えている。しかしその馬に食べさせる馬糧を運ぶ作業は、四十歳を過ぎても体力の衰えた私にとっては悩みの種であった。軍人勅諭を覚えるのはまだ良いとして、術科訓練も苦手であった。若い人と違って体がいうことを利かないのである。

ある日、志願兵上がりの兵長が、老兵を一人ひとり幕舎前に呼び出して、いきなり飯盒を投げつけた。いくら訓練をしても成果が上がらない老兵どもに、業を煮やしてのことに違いない。私の直前に呼び出された戦友は、投げられた飯盒をまともにも手の甲に受けて、真っ赤に腫れあがっていた。私のときには顔に向かって投げつけられたが、運良くはずれてけがをせずすんだ。

南では、沖縄の我が軍が米軍に追いつめられて、「玉砕」という言葉が聞かれるようになりはじめ、暗闇の中に放り出された子羊のように、どうしようもない不安に駆られていた。なるようにしかならないと割り切っていたものの、あとからあとから恐ろしさがわき出てきてどうすることもできず、そんな自分を見つめ直すこともできずにおどおどしていた。

そして数日後、幕舎の前に力のない字で書かれた「沖縄ついに玉砕」の掲示を見たとき、これは大変なことになった、いよいよ敗戦が目の前に迫ってきたな、と思った。陣地の雰囲気は慌ただしいものに変わっていった。

そして八月八日、ついにソ連が参戦し、私たちの陣地からも、火山の噴煙のように幾条もの猛煙があがって北の空を覆っていくのが見えた。関東軍が誇っていた北の守りも、ソ連軍の攻撃を受けて一瞬間の間に崩れ去ってしまった。我が陣地でも、指揮系統が乱れて的確な命令指示が届かず、

どう動いたらよいか分からない兵隊たちが右往左往していた。空にはソ連機が金属音を響かせて、縦横に飛び交っていた。陣地からは、ソ連軍の攻撃が四方で行われているのが手に取るように分かった。

ふと明るくなった方を見ると、清津港と思われる方向に夜空を焦がす火の手があがった。その光景は夢の中で美しいパノラマを眺めるような、私が今まで見たことのない美しささえ持ったものであった。空からは、黄や赤や青など色とりどりの照明弾が落ちていく。地上からは、探照灯が光の絵を描くように夜空を掃く。探照灯などにはお構いなしに、照明弾を頼りに飛行機からは爆弾が投下される。爆発音と共にあたりがぱっと明るくなる。こんなことの繰り返しで、要所要所は火の海になっていった。

この時期、出村隊長が野沢隊長に代わった。私は指揮班に編入され、隊長付きとなって隊長のお世話をすることになった。このころソ連機は、地

上すれすれに飛びながら「無駄な抵抗はやめなさい」という内容のビラをばらまくなど、戦争終結への呼びかけが一段と激しくなってきた。

兵器弾薬も食糧も十分に無く、部隊の士気は低下、文字通り戦意を喪失して兵隊はただおろおろしていた。十七日には佐野師団長が自決し、軍旗が焼却されたことが伝わり、士気はますます衰えた。明けて十八日の朝を迎え、指揮所では機密書類を焼却し、陣地では兵器を分解して要部を棄却、隊長は十一時半過ぎに涙ながらに戦争終結と部隊解散を宣言した。決別の酒は冷え冷えとして、多くの者は一口飲んで吐き捨ててしまった。

部隊解散が告げられてからまもなく、あちらこちらで爆発が起こった。私の上司、塩沢、潮留両兵長も抱き合いながら手榴弾を爆発させて自決したのに続いて、あちらでもこちらでも自決が起こった。私は私物として持ち歩いていた袈裟と数珠と鈴を、雑のうから取り出し次から次へと読経して回った。

兵隊たちは思い思いに山を下りて行き、午後四時ころにはほとんど姿は見えなくなっていた。私はふと我に返って、何とか家族を連れて日本に帰りたと思った。そう思うことで希望が燃え、必死になって念仏を唱え続けた。生死の極限状態の中で生き抜くためには、ただただ念仏にすがるほかに道がなかったことは確かであった。

私たちの陣地であった光華山の裏道は、ソ連軍の陣地に通じていて極めて危険だったので、夕方薄暗くなつてからその裏道を横切つて雑木林に飛び込んだが、すぐに背後から数発の銃弾が飛んできた。この付近にまでソ連軍の精鋭部隊が進駐していたのである。驚いて身を潜めじっと息を凝らしていると、そばの藪から顔を出したのは宮城県出身の戦友、佐藤綱治君であった。二人で一緒に山を下りかけたら、同じ班の鵜飼、塩沢、深町の三人に出くわした。五人で草陰に身を隠し、小川の水を飲みながらどう逃げようかと話し合ったが、土地勘の全くないお互いだからこれといった

名案が浮かぶはずはなく、日が暮れてしまった。

翌朝三人とは袂を分かち、佐藤君と二人で警戒しながら山麓に沿つて西の方へ歩き出した。明日どうなるかも分からない敗残兵にとっては、青白い月の光まで冷酷そのもののように思え、ちょっとした物音にもおびえながら慎重に行動した。やがて道は十字路に出て土橋があつたので、しばらくその下で休むことにした。

あけて十九日の早朝、遙か前方の山で爆発音が聞こえた。川の水のどを潤すのもそこそこ歩き始めた。状況も分からず、とまどうことばかりで心細さは深まるばかりであつた。立ちこめていた朝もやが晴れたとたん、目の前に馬を引いた人が現れたのを見て縮あがってしまった。満人らしいので、近づいてくるのを待つことにした。会つて話してみると、満人は穏やかな人であつた。彼は私たちをいたわるように「昨夜前方の私の部落にソ連兵が入つて来た。この川に沿つて左に行け」と教えてくれたのである。地獄に仏とはこの

ことかと、私たちは感謝の気持ちいっぱい両手を合わせて礼を言い、教えられたとおりの左側の背より高く生い茂る高粱畑に飛び込んだ。

千メートルほど歩いて畑から見ると、遠くの部落から戦車の一団が砂塵を上げて走っているのが見えた。戦に負けて逃げるものにとって、捕虜になつて虐殺されることを避けるために、不安な中で必死に生き延びる努力をした。幸い戦車と反対の方向の崖をよじ登ることができた。

やがて細い道をたどっていくうちに畑に出て、この地方独特の番小屋があつて、ここに避難することができればまことに都合なことであつた。近づいて戸の隙間から中をのぞくと、なんと私たちと同じ避難兵がぶるぶる震えながら座っているではないか。こちらも驚いたが、同じ仲間と分かつてお互い胸をなで下ろし、身分を話し合つた。彼は高橋といつて、牡丹江の通信隊に所属していたという。お互い今の無事を祝い、慰め合つてすぐ友達になつた。高橋の話では、「班長以下

十人がここにたどり着き、前の豆満江を泳いで渡ろうとしたが見ている前で全員行方不明になつた。私は全く泳げないので、仕方ないから歩くことにした」のだという。明るくなって、実際に逆巻く流れを見た佐藤君は、「豆満江を渡つて朝鮮に行こう」と言っていたのをあきらめるしかなかった。

二十日にはもう道路という道路はすべてソ連軍でいっぱい、要所要所には歩哨が立っていたので、日中は一歩も動くことはできなかった。夜も更けたころ行動を開始したが、夜が明けてみれば小高い山を一回りしたに過ぎなかつた。みんな落胆して気が抜けたようになってしまい、佐藤君も「もう別れたい」と言うなり、下の雑木林に消えて行つた。私たちと佐藤君のどちらが生きながらえるのかは、神ならぬ私を知る由もないが、この困難な避難行で一人減つたことがものすごくさみしかつた。

ともかく、日中は高粱畑や草むらに隠れ夜間行

動することにした。ある夜の十一時ころ、銃声が出た途端ものすごいめき声が聞こえた。避難しようとしていた兵隊が、歩哨線に引っかかって撃たれたのだろう。私たちも、もう生きた気持ちはしなかった。じっと息を凝らして潜んでいたが、午前一時ごろあたりが静まったのを見て、這いながら道路を横切って雑木林に駆け込むことができた。

それから幾日も山から山へと歩きながら、とある谷間に降りていった。不思議なことだが、なぜか怖いという気が起こらなかった。谷間の裾に肩を寄せ合うように数件の農家が建っていた。取っつき家の家に入って、両手を合わせながら一晩泊めてほしいと頼んだ。主人は北朝鮮系の李という名の優しい人で、私たちに同情してくれたのである。泊めてもらうことができた。今でもそのときの嬉しさを忘れることはできない。

翌朝、近くで銃声が出た。お礼もそこそこに別れを告げ、逃げるように家を離れた。ところが街

道に出た途端、ソ連兵と朝鮮解放同盟兵合同の監視兵に出会ってしまった。正直もう駄目だと思っただが、あちこちの小銃の音に気を取られたのか、あるいは朝鮮の農民とでも勘違いしたのか、気にする様子もなく行ってしまい、危うく一命を取りとめた。草むらに隠れてあたりの様子を見たが、豆満江に架かっていた橋という橋は、ソ連軍の追撃を避けるために日本軍が全部爆破してしまっていた。三道講の橋も、やはり影も形もなくなっていた。

この川をどう渡るかいろいろ考えたが、流れる川の勢いを見てひるんでしまった。どうしようもないのでしばらく考え込んでいたが、運良く小舟がこちらの岸に着くのを発見した。満人の船主にありったけのお金を見せた上で、両手を合わせて泣かんばかりに頼み込み、やっと聞き届けてもらった。川を渡りきったときの嬉しきは格別であった。しかし、渡ったあとがまた大変であった。目の前にはついたてのような崖があって、そ

れを身を隠しながらよじ登らなければならなかった。頂上に着いてみると、ここには電信隊がいたらしく、電線が山のように積まれたまま放置されていた。太陽が西に傾きかけたころ、山を下り始めた。川の水を飲み草の根をかじりながら、お互いの顔を見合わせ、今日も命を長らえたと生きているのが不思議との思いを深めた。

山の陣地を出て九日経った二十六日の昼下がり、最初に入隊した部隊の兵舎にたどり着いた。周りに鉄条網が張り巡らされた営庭に、幕舎が建てられ中には日本軍の捕虜が入れられていた。鉄条網の周りには、三人一組のソ連兵の歩哨が立って周りを警戒していた。私たち二人ではどうにもならず、黙って静かに通り過ぎることにした。

幸い無事に延吉市内に入ることができ、高橋君とはここで別れた。私は東本願寺延吉布教所の天児師を訪ね、無事延吉避難民の仲間に入れてもらった。といっても毎日がどん底の生活であった。二、三日過ぎたある朝、朝鮮解放青年同盟本

部から寺の難民全員に寺の庭に集合するように命じられた。まもなく数人の同盟員が、日本人住宅に隠してあったといって竹槍や刀を私たちの前に放り出し、「これは朝鮮人を殺すために使ったのだろう」と決めつけ、所有者を呼び出してどこともなく連れ出して殴り殺してしまったということであった。その後、住職の天児師も朝鮮解放青年同盟本部から寺を明け渡すように言われたのを断って、河原で殴り殺されてしまったと聞いて、皆震え上がってしまった。

このことがあって避難民は帰国をあせりだったが、列車の手配など日本人にはどうしようもなかった。ようやく九月十五日、新京行きの列車に乗ることができた。幾度となく検問所を通過して、敦化で再び難民生活に入った。私は在中国日僑本部の囑託僧になって毎日読経供養に走り回った。子供たちは中国人からたばこを卸してもらって売り歩いたが、糊口をしのぐのが精いっぱいであった。戦争に負けたためとはいえないものの、昨日

に変わる今日の姿、当然といえは当然だが皆乞食同然の姿であった。

ここ敦化での三千有余人の同胞避難民は、割り当てられた十数カ所の避難所で生活していたが、現地人の襲撃を受けて家屋は床板や窓ガラスも壊され、土間に毛布などを被るだけで寝るといふ、文字通り着の身着のままの生活であったが、誰一人文句を言う者もなく堪え忍んでいた。ただ、飢えと寒さとによって弱った人たちが、病魔に襲われて亡くなるのが日に日に増えていった。母の名を呼ぶ声がだんだん小さくなって、ついには死んでいく子、合掌しながら恨めしそうな目つきで亡くなっている人、やせ衰えて骨と皮だけになった屍、地獄の苦しみというのはこのようなことを言うのだらうと思った。

身代わりの観音

九月もすでに終わろうとする日の朝早く突然、軍司令部の連絡兵が事務所に入って来てわめき始めた。通訳を呼んでただしたところ、「慰安婦を

一人明朝までに司令部に差し出せ。もし出さなければ避難民を皆殺しにする」と言っているという。事務所では班長などに召集をかけて協議をしたが、誰かを指名するというなどできる問題ではなかった。みんな顔を見合わせるばかりで、どうすることもできないまま午後になってしまった。

この話はすぐに避難所中に知れ渡って、みんな震え上がった。私の妻は病身で八歳、五歳、零歳の子持ちであったが、もし自分が指名されたらと思っただけで青ざめていた。事務所としては、いやでも結論を出さなければ進駐軍のことだから何をするか分からず、ただいらいらするばかりであった。みんな最後はくじ引きでもするより仕方あるまいと思っていたようであった。

いよいよそう思うしかないと思い始めていた夕方、一人の婦人が事務所に現れ、「私が行きます」と部長に申し出たのである。名乗り出たのは、○
○県○市の二十八歳の独りの女性であった。この

女性は、翌日連絡兵に連れられて軍司令部に行った。残った婦人たちはこれで一安心と胸をなで下ろした。

一週間ほど経った昼下がり、私は本部から呼出しを受けたので早速部長を訪ねた。部長はいつになく青い顔をしていたが、物静かに切り出した。

「実は本部前の倉庫に先日の女性の死体が返されてきた。すぐお参りしてほしい」というのである。すぐに倉庫に行つて係の方と挨拶を交わし、遺体に手を合わせお参りした。お顔はやすらかで別に不審な状況はなかった。伺つてみると、彼女の夫は五月はじめに召集され、ソ満国境で陣地構築中、八月九日ソ連軍が進駐して来たときに行方不明になったらしい。子供もいないうえに病身で、この先の見通しも立たない避難生活など思いつめたあげく、少しでも人のためになるのならと決心しての応募であつたらしい。全くの素人が慰安婦の毎日に耐えられるはずはなかった。彼女はソ連兵が飲んでいたアルコール度の強いウォッ

カを、勧められるままにあおっているうちに体を壊してしまったということであつた。

悲惨な犠牲であつた。人間はできることなら辛いことは避けたい、そのためには人の迷惑など考えないのが普通であろう。それなのに彼女はみんなに代わつて犠牲になろうとしたのである。筵むしろに寝かされ、顔に白い布をかけられた彼女を見て、お参りに来た女性たちはその哀れさにこらえきれず涙を流した。

彼女の遺髪と爪を切つたのを紙にくるんで私が預かり、遺体は町はずれの野原に埋葬した。その後、元料理屋に勤めていた女性が四人、軍司令部に行つたとのことであつた。みんな自分がかわいく身を守ろうとする中で、自分を捨てて犠牲になつたのは、まさに観音様であつた。

私たちはこうした尊い命を踏み台にして生き延びた、いや生かされたのだ。私なりに自分を忘れて人のためになろうと決心したものの、事実何一つできない有様なので、慚愧に耐えないと思つて

いる。ちなみに私が預かった彼女の遺髪と爪は、引揚げ後、彼女と同県人の高橋先生にお願いで、彼女の母親にお渡ししてもらい、ひとまず安心している。

三月半ばになってソ連軍が引き揚げたあととは、中国共産党が政権を取り各地で人民裁判が行われ、皮膚科の権威であった菅原敦化病院院長をはじめとして、元軍人、民間人を問わず簡単な裁判で死刑となって北満の露と消えた。飢餓、酷寒、病魔、果てしない人間の欲望など、当時を思い起こすとき未だに肝を冷やす思いである。

一年を過ごした九月、やっと引揚げが始まり、列車に乗って住み慣れた敦化をあとにして、十月錦州に着いた。駅頭には畳三枚ほどを横に並べた板に、蒋介石閣下の宣言文が張り出されていた。

「日本とは長年にわたり戦争状態が続いたが、今や日本は敗戦国となった。中国はあえて日本を恨まず互いに親善を図り、日本人の引揚げ促進を

図る」

この日本人に対する温かい言葉に、涙せずにはいられなかったのは私だけではなかった。

私は職業柄、中国僧侶からは心からの支援をいただき、また見知らぬ朝鮮の方々に助けられて困難な場面を切り抜けられたことを思い合わせ、ただただ感慨無量で、生涯忘れることはないと思っている。

全く戦争というものは、社会を混乱に落とし、人々の安らかな生活を奪い、狂気の人間を作り出すなど地獄さながらの苦難を招くものである。このことを再認識し、平和世界の建設に邁進しなければと思う次第である。